

“ A Rose for Emily ” のクロノロジー

著者	谷口 義朗
雑誌名	英文学論集
巻	48
ページ	1-10
発行年	2008-12-28
その他のタイトル	The Chronology of “ A Rose for Emily ”
URL	http://hdl.handle.net/10112/1145

“A Rose for Emily” のクロノロジー

谷 口 義 朗

1930年に雑誌 *The Forum* に掲載された“A Rose for Emily”は、Lionel Trilling の“A Rose for Emily, ...is essentially trivial in its horror because it has no implications, because it is pure event without implication.” (1931, 69) という完全否定的な低い評価にもかかわらず多くの選集に収録されて広く読まれるとともにそれに関するおびただしい数の論文が書かれてきた。それらは主としてエミリー (Emily Grierson) の異常といえる心理、行為をどのように解釈するかということを中心に展開してきたと総括してよく、たとえばエミリーが古い南部をそしてバロン (Homer Barron) が北部ないし新しい南部を象徴しているというふうな解釈も彼女の行為の根本に変化を受け入れようとしない態度を見るような観点から出てきたと言えるのである。膨大な数に上る論考の大方に目を通してというわけではないが、この作品について基本的に論ずべき点を以下ようにまとめることはできると思われる。すなわちクロノロジーもふくむ時間に関する問題、町の住人たちを代表していると考えられる二人称複数形の語り手あるいは視点の問題、そして最後にエミリーによるバロン殺しとはいったい何だったのかという問題である (森岡 266-67)。この小文では一番目の問題のとりわけ年代記のことを取り上げてみる。「エミリーへのバラ」は短い作品だが、そこには顕著なほどに多くの時間に関する言及がなされており⁽¹⁾、読者とそのクロノロジー作成へ誘惑しているかのように見えさえるのである。少なからぬ数の研究者が実際にその作業を試みている。

この作品は、格式を重んじる横暴な父親によって婚期を奪われ、独身のまま一生を終えることを余儀なくされたエミリー・グリアソンという孤独な女性の物語だが、その死と葬式という物語の現在に始まり彼女の生涯を過去へと逆にとどっていく作品の構成だけが年代記組み立ての (大きなも

のではないにせよ) 障害になっているわけではない。過去へとさかのぼっていく語りに加えて、出来事が何年に起こったというふうにはなく、主としてその出来事と他の出来事との時間的な距離(たとえば「それは～の何年後」というふう)にあるいはそのときの彼女の年齢だけが示される、ということがこの作業を少々手間のかかるものに行っていると言える。しかし人生の大半を古びた薄暗い屋敷に閉じこもって過ごしたエミリーの人生にそれほど多くのことがあったわけではなく、その年代記作成は十分射程の内にあると読者は感じることができる。(多少の障害がむしろクロノロジー作成の誘因となっているのだ。) 以下のような事実を示すのに、テキスト内での特に込み入った照合作業を必要とすることはない。(カッコ内はエミリーの死亡時の年齢から逆算して得られるそのときのエミリーの推定年齢。便宜的にエミリーの死亡時の年齢が明示されている箇所を最初におく。あとはページ順。)

- ・エミリーは74歳で死亡。(128)
- ・Colonel Sartoris 市長がエミリーの税金の免除を実施したのは1894年。(119-120)
- ・エミリーの税金免除をめぐる市議代表団の訪問はその(=エミリーの死の)10年前。(エミリー64歳の時)。(120)⁽²⁾
- ・その(=代表団の)訪問の8～10年前にエミリーは下絵描き教室をやめていた。(エミリー54～56歳ころ?) (120)
- ・悪臭騒ぎはその(=代表団の)訪問の30年前。(エミリー34歳の時)。(121)
- ・父親の死はその2年前。(エミリー32歳のとき)。(121-122)
- ・父親が死んだとき、エミリーは30歳になっていた。(123)
- ・下絵描き教室はエミリーが40歳ころの6,7年間開かれた。(128)

上記から明らかなように明確な年代への言及は一箇所しかない。1894年に時の市長サートリス大佐がエミリーの税金を免除したという箇所だけである。その他ある一つの出来事を特定の年に結びつける手がかりとなる

ような歴史的事実への言及もテキスト中にはない。しかし年代記作成には物語中の出来事をつなぎとめる具体的な年代が一つはなくてはならず、したがってこの1894年という年を基準に出来事の年代を定めていくことになるのだが、残念なことに、このときエミリーが何歳だったのかが推測できるような言及がまったくない。1894年の税金免除の件と別の出来事との時間的な距離を示す記述もいっさいなく、「当時市長であったサートリス大佐が…彼女の税の免除、彼女の父親の死にさかのぼって永久に続く特別免除を行った1894年のあの日」(119-120)という語り手の言葉は、エミリーの父親の死は1894年より後ではないということを示しているだけなのである。

それでは1894年という年をどのように年代記に取りいれたらよいのか。今までに作成・発表されているクロノロジーは9つほどあるようだが、そしてそれらはそれぞれに異なるのだが、一番大きな相違点はGene E. Mooreが言うように、エミリーの父親が死んだ年を1894年あるいはそれ以前のしかしそれにごく近い年に設定しているか、あるいはエミリーが陶磁器の下絵描き教室を始めた年を1894年ころととらえているか、である(129)。年代記は大きくこの二つのグループに分けることができる。つまり一つのグループは「エミリーの父親が死んだとき、彼女に残されたものは屋敷だけだというわさが広まった」(123)というような記述から、父親に死なれ何の資産もないエミリーを哀れんで当時のサートリス市長が父親の死後すぐに、あるいは死後間もないときに免税の処置をとったとみなしているものであり、また別のグループは、父親の死後何年かたった後にエミリーの窮状を見かねた市長が彼女に下絵描き教室を開かせ、生徒をそこに送ってわずかなお金を稼がせるように手配する一方で税金の免除を行った(あるいは税金の免除を行う一方で教室を開かせた)と考えているのである。

たとえばPaul D. McGlynnは税金免除は父親の死後すぐに行われた、すなわち父親は同年つまり税金免除が始まった1894年に死んだと考えてクロノロジーを作成している。上記の二つのグループの前者に属するわけだ

が、彼は1894年、父親の死んだ年のエミリーの年齢を30歳と考えているから（実際は32歳であろう）、したがってエミリーが生まれたのが1864年で亡くなったのが1938年ということになる（91）。すでに述べたとおりエミリーが74歳で亡くなったということはテキストにはっきり書かれている。また Robert H. Woodward は税金免除の措置がとられたのを父親の死の2年後というふうにとらえ、父親死亡時のエミリーの年齢を32歳として年代記を作成しているから、彼の場合にはエミリーが生まれたのが1860年、死んだのは1934年ということになる（85）。おのおのその前提の上に立てばそれぞれその内部においては一応辻褄があっていると認めることができる。しかしそうした年代設定は ‘a great discrepancy’ を生じさせ（Nebeker 471）、‘absurd’ で ‘strange’ な結論を導く（Perry 344n26）ものだと第2のグループに属する研究者たちは言う。つまり前者のグループの年代設定に従えばエミリーは「エミリーへのバラ」という作品が発表された1930年よりもかなり後（4年後ないし8年後）になってから死ぬことになる。それは「大きな矛盾」であり、「不合理な結論」だと彼らは言うのである。つまり作家の心理としておかしいということなのだろう。主人公のエミリーが作品の発表後何年かたってから死ぬというような設定は、別に問題ないと言え言えるのかもしれないが、作家の創作心理としては不自然だ、少なくとも作品発表の時点までに死んだことにするのが自然だということなのだろう。（Nebeker や Perry がそう述べているのではないのだが。）だがそうした（エミリーの死がこの物語が発表された4年ないし8年後に起こるといふような）結論がたとえおかしなものに思えたとしても、それが1894年という年を別の出来事の方に向かわせることにはなるにせよ、何か具体的な事件に直接に結びつける助けにはもちろんならない。

Menakhem Perry や Helen E. Nebeker らはすでにその語を引用したように上記のようなクロノロジー的結論をおかしいと考えるが、そのようなおかしい結論が導かれるのは当のクロノロジー作者たちが1894年を父親が死んだ年でもあると解しているからで、この年にはそれとは別の事件を結びつけて考えるのが適当だと彼らは言う。たとえば Nebeker は1894年

に父親の死を結びつけている McGlynn を批判する短い論文において以下のような箇所に注目する。エミリーが40歳頃の6～7年間、陶磁器の下絵描き教室を開いていた時のことに言及した一節である。

She fitted up a studio in one of the downstairs rooms, where the daughters and granddaughters of Colonel Sartoris' contemporaries were sent to her with the same regularity and in the same spirit that they were sent to church on Sundays with a twenty-five-cent piece for the collection plate. Meanwhile her taxes had been remitted. (128)

Nebekerによると、これは時の市長サートリス大佐がその力を用いて南部のレディたるエミリーに恥をかかさぬようにわずかの金を稼ぐ方途を与えたのである。そしてそれと「同時に」サートリス市長は税金免除の措置をとる（もちろんこの場合にもエミリーの誇りを傷つけぬように配慮して）。後の文章の最初の 'Meanwhile' という語は定義によれば 'in or during the intervening time', 'at the same time' であるから「同時に」と解することができるというわけである。そして Nebeker はおそらく「彼女が40歳頃、陶磁器の下絵描き教室を開いていた6～7年の間」(128) という記述に拠って、1894年をエミリー40歳の年とし、生年を1854年ころ、没年を1928年ころとしている。こうするとエミリーはこの作品が発表される2年前に亡くなったことになる(Nebeker 471-73)。Perry も "She (=Emily) was exempted from taxation in the period when she gave china-painting lessons." (344n26) と言って、1894年を下絵描き教室の時期と結びつけている。父親の死後何年かたってエミリーの窮状を見かねた市長が彼女の税金を免除してやり、その一方で下絵描き教室を開かせるよう手配したということは十分考えられる。

ここで手書き原稿にもとづく Gene M. Moore 自身の研究を見てみよう。彼はこれまで誰もこの作品の手書き原稿に注意を払わなかったことは驚くべきことだ、というふうなことを言いながら、この原稿では作者は

税金免除に 1894 年とは別の年をあて、父親の死に具体的な年を設定している一つまり税金免除を 1904 年とし、この特別免除は「16 年前の父親の死にさかのぼって」というふうに 1904 年から 16 年さかのぼった 1888 年を父親死亡の年としているという（実際そうしている [William Faulkner *Manuscripts: These Thirteen* 188]）。フォークナーがなぜ最終的にこの税金免除の決定をした年を 10 年ずらして 1904 年から 1894 年とし、「16 年前」という父親死亡の年への具体的な言及を削除してしまったのか。ムアは憶測の域を出ないがと断りながら、エミリーの父親が死んでから市長のサートリス大佐が税金免除という慈善的措置をとるまでの期間が 16 年というのは少し長すぎると思えたのではないかという (130)。いずれにしても手書き原稿では彼女の税金が免除されることになったのは 1904 年、そしてそれは父親の死から 16 年後ということであった。

そしてムアはさらに、タイプ原稿で免税措置がとられた年が変更になり、「16 年前」という言及が削除されたからといって、フォークナーがエミリーの父親が死亡した年を変更したということには必ずしもならないであろうという。父親死亡の年を同じように 10 年ずらして 1878 年にとすると、エミリーは彼女の葬儀に参列していた南北戦争の兵役経験者たちとほぼ同じ年代になってしまう。それは具合が悪い。Cleanth Brooks が “the very old men — some in their brushed Confederate uniforms — on the porch and the lawn, talking of Miss Emily as if she had been a contemporary of theirs, believing that they had danced with her and courted her perhaps,” (129) といった箇所を（別のことを証明しようとして）取りあげて言ったように、この “the very old men” は “a number of years older than she” でなくてはならないのである (Brooks 383)。このようなわけでムアは父親死亡の年を手書き原稿のままの 1888 年に設定し、自身の年代記を作成している。これに従えばエミリーの出生は 1856 年、死んだのは 1930 年ということになる (130–31. 134)。

これは手書き原稿は参照していないが、税金免除が行われた 1894 年の年を下絵描き教室と結びつけて考えている John V. Hagopian et al. (83) や

Nebeker (472-73), Brooks (383) らの作成した年代記にほぼ(?) 重なる。エミリーの生年に関して言えば Hagopian et al., Nebeker は 1854 年, Brooks は 1852 年としている。2~4 年のずれである。エミリーのクロノロジーはだいたいこの辺に落ち着くのではなかろうか。William T. Going も同じグループに属するのだが、彼の場合は *Portable Faulkner* に拠ってエミリーの没年を 1924 年に設定しており、それにしたがって生年が 1850 年となるため 6 年の開きがある (51-52)。

ちなみにムアは 1894 年という年をエミリーの父親の死と結びつけている一つ目のグループは、「エミリーへのバラ」の語り手が「彼女の父親の死にさかのぼって永久に続く特別免除」(120) というふうに言っているのを無視している、税金は毎年徴収されるのだから、エミリーの税金が父親が死んだのと同じ年に免除されたのなら「父親の死にさかのぼって」というような言い方はしなかっただろう、というようなことを言っている (132)。また 1894 年を父親の死に結びつけた場合、必然的にエミリーの没年が遅くなってしまうわけだが、Brooks はたとえば父親が死んだのを 1894 年だと考えている McGlynn がエミリーの没年としている 1938 年という年をあげ、この年にエミリーの葬儀に参列している旧南軍兵士はいったい何歳なのか、南北戦争 (1861-1865) の最終年にたとえば 15 歳で加わった少年でさえこの年には 88 歳になっているではないかと言っている (383)。ありえないことはないがほとんど不可能な話というべきだろう。

さて最初の方であげておいた主な出来事とその時のエミリーの推定年齢をもとに、父親の死んだ年をムアにしたがって 1888 年とすると、このときエミリーは 32 歳と考えられるので、生年 1856 年、没年 1930 年という内容もほぼ同様な年代記が出来あがる。

1856 年： エミリー生まれる。

1888 年：エミリーの父親没。悪臭騒ぎの 2 年前。

1889 年：エミリー、ホーマー・バロンと出会う。彼女の父親が死んだ

次の年の夏のこと。

1890年：悪臭騒ぎ。市議代表団の訪問の30年前。

1894 - 1901年：陶磁器の下絵描き教室。エミリー40歳のころの6～7年。

1894年：市長サートリス大佐がエミリーの税金免除の措置をとる。⁽³⁾

1920年：税金支払いを求める市議代表団の訪問。エミリーの死の10年前。

この8～10年前に下絵描き教室を閉じる。

1930年：エミリー74歳で没。

ところでつとに指摘されていることだが年代記の内部でどうしても他の部分と整合しない、内部矛盾をおこす箇所がある。それは陶磁器の下絵描き教室が開かれていた時期に関してである。これはエミリーが40歳頃に開かれていたとされるものであるが、エミリーの死から逆算すると、市議代表団の訪問がその（エミリーの死の）10年前、そしてその代表団の訪問は、彼女が下絵描き教室を閉じてから8年から10年後のことというふうに語り手は言っているから、エミリーは教室を閉じてから（10 + 8ないし10 + 10で）18～20年後に死んだわけだ。74歳で死んだのだから、彼女が教室を閉じたのは（74 - 20ないし74 - 18で）54～56歳の時のことになる。レッスンは6、7年続いたと語られており、54歳で閉じたとしても始めたのは47、8歳（つまり早くても47、8歳～54歳の間に教室は開かれた）ということになって、その頃エミリーは40歳くらいということにはまったくならない。これはどうしても繕えない綻びというべきで、下絵描き教室をどこにおいても他の出来事と時間的にあわなくなる。（McGlynnのクロノロジーではこの問題は一見解決されているように見えるが、「6、7年続いた下絵描き教室」を12年間続いたようにしたり、市議代表団によるエミリー邸訪問と彼女の死の間にテキストには何の言及もない最後の訪問者をおいたりしている〔91 - 92〕。）

この点はどう考えたらよいのだろうか。もちろんこんなことは作品のクロノロジーを作って年代の正確な辻褃あわせをしてみてもしない限り気がつきさえしないことで、普通に読んでいる分には何の疑問も生じることは

ないし支障もない。だがこの作品には最初述べたように時間への言及がおよびたしい。作者はそれらを書き込み、(税金の支払いをめぐる市議代表団の訪問はエミリーの死の10年前で、それは下絵描き教室閉鎖の8～10年後のこと、といったふうに)相互参照させながら自ら精緻なクロノロジーを組み立てようとしているかのようである。そしてそうした配慮の結果それはほぼ完璧に出来あがったのに、一箇所だけ不注意なミスで他と齟齬をきたす部分が残ってしまったということなのだろうか。

注

(1)以下にそれらを列挙する。

- ・エミリーの死に先立つ10年ほど黒人の召使以外誰もエミリーの屋敷の中を見していない(119)。
- ・エミリーの税金が免除されたのは1894年(120)。
- ・市議代表団の訪問は陶磁器の下絵描き教室をやめて8～10年後(120)。
- ・悪臭騒ぎは代表団の訪問の30年前(121)。
- ・またそれは父親の死の2年後、バロン失踪のすぐ後である(122)。
- ・エミリーは30歳でまだ独身(123)。
- ・バロンが現れるのは父親が死んだ後の夏(124)。
- ・砒素購入は町の人々が“Poor Emily”と言い始めてから1年以上過ぎたころ(125)。
- ・エミリー74歳で死亡(128)。
- ・下絵描き教室を開いていたのはエミリーが40歳ころの6～7年間(128)。
- ・エミリーの死後2日目に葬儀(129)。
- ・二階にある一つの部屋を40年間誰も見ていない(129)。

(2)三つ目の「市議代表団の訪問」がエミリーの死の10年前という判断は、冒頭部のエミリーの葬儀がとりおこなわれるに際しての「その屋敷の中を…老僕以外は少なくとも10年間見たことがなかった」(119)という記述によるが、この間に訪問者がなかったとは言いつれもない。ほとんどの年代記はなかったとみなしているが、Paul D. McGlynnはあったとしている(92)。しかしそのことに関する記述はテキスト中に全くない。

(3)Gene M. Mooreは下絵描き教室が開かれたのを1年早く1893年からとしているが、サートリス市長が税金免除の措置をとるとともにその一方で教室を開かせた

ということかも知れない。実に些細なことではあるが。

Works Cited

- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: Toward Yoknapatawpha and Beyond*. New Haven: Yale UP, 1978.
- Faulkner, William. *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Random House, 1950.
- . “A Rose for Emily.” *Collected Stories* 119–30.
- Going, William T. “Chronology in Teaching ‘A Rose for Emily.’” *William Faulkner: A Rose for Emily*. The Charles E. Merrill Literary Casebook Series. Ed. M. Thomas Inge. Columbus, OH: Charles E. Merrill, 1970. 50-53.
- Hagopian, John V., W. Gordon Cunliffe, and Martin Dolch. “A Rose for Emily.” *William Faulkner: A Rose for Emily*. The Charles E. Merrill Literary Casebook Series. 76–83.
- Inge, M. Thomas, ed. *William Faulkner: A Rose for Emily*. The Charles E. Merrill Literary Casebook Series. Columbus, OH: Charles E. Merrill, 1970.
- McGlynn, Paul D. “The Chronology of ‘A Rose for Emily.’” *William Faulkner: A Rose for Emily*. The Charles E. Merrill Literary Casebook Series. 90-92.
- Moore, Gene E. “Of Time and Its Mathematical Progression: Problems of Chronology in Faulkner’s ‘A Rose for Emily.’” *William Faulkner: A Rose for Emily*. The Harcourt Casebook Series in Literature. Ed. Noel Polk. Orlando: Harcourt, 2000. 127–36.
- Nebeker, Helen E. “Chronology Revisited.” *Studies in Short Fiction* 8 (1971) : 471–73.
- Perry, Menakhem. “Literary Dynamics: How the Order of a Text Creates its Meanings [With an Analysis of Faulkner’s ‘A Rose for Emily’].” *Poetics Today* 1: 1-2 (Autumn 1979) : 35-64, 311-61.
- Polk, Noel, ed. *William Faulkner Manuscripts: These 13*. New York: Garland, 1985.
- Trilling, Lionel. “Mr. Faulkner’s World.” *William Faulkner: The Contemporary Reviews*. Ed. M. Thomas Inge. Cambridge: Cambridge UP. 1995. 69-70.
- Woodward, Robert H. “The Chronology of ‘A Rose for Emily.’” *William Faulkner: A Rose for Emily*. The Charles E. Merrill Literary Casebook Series. 84-86.
- 森岡裕一 「『エミリーへのバラ』における反復のモチーフについて」, 『共和国の振り子—アメリカ文学のダイナミズム』大井浩二監修, 花岡秀・貫志雅之・渡辺克昭編 東京: 英宝社, 2003. 266–280。